

笑がおプロジェクト みの

～自分のために我が家でルール～

美濃市教育委員会人づくり文化課



笑がおプロジェクトって何？

ゲームやスマホ、タブレットなどの使い方を家庭でよく話し合い、ルールづくりを進める取り組みのことだよ。これは、美濃市の連合PTAの方たちが中心になって、美濃市内すべての保護者と学校で取り組んでいるんだ。



笑がおプロジェクトって、どうして始まったの？

今から2年前、コロナの感染防止のために3ヶ月間も学校が休校になったね。6月に学校が始まったんだけど、その頃から美濃市の子どもたちの間にこんな心配な様子が見られるようになったんだ。

- ・真夜中過ぎまでやるなど、ゲームのやり過ぎて生活のリズムが乱れる。
- ・SNSに、人の悪口を書き込む。
- ・ゲーム内のトラブルが実際の学校でのいじめに発展してしまう。
- ・ゲームがうまくいかないと、イラついて物を投げつけたり、壊したりする。



こういう問題を何とかしようと、美濃市の子どもたちやPTAで話し合っ、みんなで取り組むことになったんだよ。



私も時間を決めてやり始めても、「もうちょっと、もうちょっと」と思って、なかなかやめられないからその気持ちわかるなあ。

令和2年の10月に、美濃市内の子どもたちにどうしたらいいか話し合ってもらったら、すべての小中学校で「ルール（約束）を決めるといい」という意見が出たの。そこで、美濃市のPTAで話し合っ、それぞれの家庭で、親子で一緒に話し合っルールを決めてもらう取り組みをしようということになったのよ。

美濃市じゅうの子どもが笑顔になってほしいという願いを込めて、この取り組みに「笑がおプロジェクト～自分のために我が家でルール～」っていう名前をつけたのよ。



笑がおプロジェクトには、お父さんやお母さんが、僕たちを守ろうという気持ちが込められていたんだね。

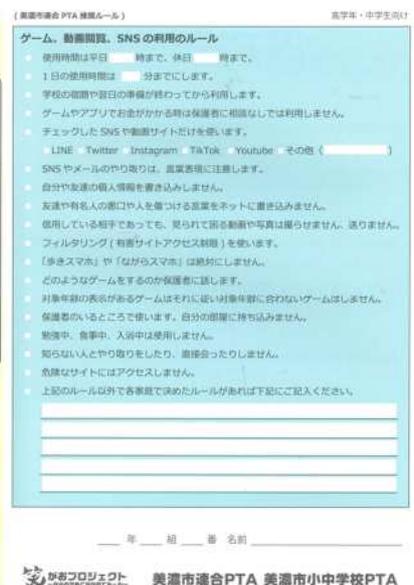
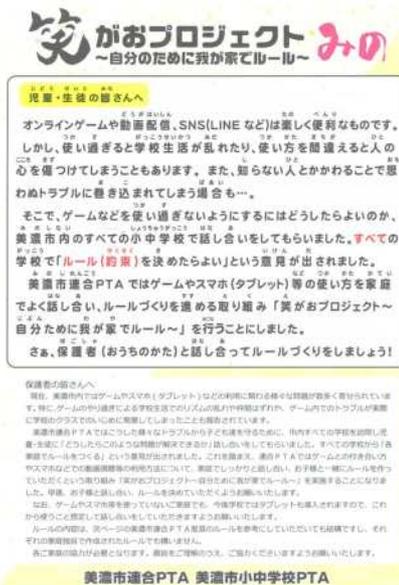
そうよ。ルールを決めるのも、守るのも自分たちでやるのが大切だと考えたの。だから、まず学校で、実際に起きている問題についてどう思うかや、どうしたら解決できるかも子どもたちに考えてもらったの。各家庭でもお父さんやお母さんも交えてよく話し合っルールを決めるようにしたのよ。自分たちで決めたことだから、ずっと続けていけるといいわね。



1 笑がおプロジェクトの具体

【令和2年度】

- ① 市連合PTA作成文書「緊急事態！ご存じですか？ゲームの影響」を発行
 - ・ゲームの問題点、約束（ルール）づくりの重要性、使用制限の設定方法などを記載
- ② PTA会長の学校訪問
 - ・市内7校のPTA会長が学校訪問し、放送等で全校児童生徒向けに実際に起きた事例を示しながら「どうしたら解決できるか」と問題提起
- ③ PTA会長の話を基に、各学校で話し合いを実施
- ④ 子どもの意見を基に市連合PTAで議論して「笑顔プロジェクト」の実施を決定
 - ・基本的なルールを「美濃市連合PTA推奨ルール（低・高学年用あり）」で示す。
 - ・使用時間や使用場所、ルールを守れなかった場合等の細かなルールは各家庭で話し合って決める。
- ⑤ 取り組みに対する保護者アンケートを実施



【令和3年度】

- ① 保護者アンケートの結果をPTA会員に報告
- ② 令和2年度、令和3年度の、市連合PTA会長の思いを、広報誌に掲載
- ③ 「笑がおプロジェクト」がきっかけとなった“我が家の事例”（各家庭の実践、子どもの状況等）を募集
- ④ “我が家の事例”をPTA会員に紹介
- ⑤ 市人権問題市民啓発講演会で行われた、いじめをテーマにした著書「教室の悪魔」で有名な山脇由貴子氏の講演に参加したPTA会員の感想を紹介

【令和4年度】

- ① 「笑がおプロジェクト」の目的や意義について改めて全ての保護者に紹介
- ② スマホ各メーカーの使用時間制限等の設定方法についての情報提供
- ③ フィルタリングサービスを使うメリットと、具体的なフィルタリングサービスを紹介
- ④ 「笑がおプロジェクト」がきっかけとなった“我が家の事例”を引き続き募集・紹介

2 成果と課題

「笑がおプロジェクト」がきっかけとなった“我が家の事例”を成果として紹介します。

○タブレットやゲームの時間を子どもたちと相談して減らしました。すると、子どもが一人でタブレットを見ている時間が減っただけでなく、その分、兄弟で仲良く遊ぶ姿が増えました。

○ゲームができる日を決めています。また、宿題など、やるべきことをやった上でゲームをするようにしています。守らせるためのルールではなく、目を疲れないようにするためなど、ルールを決める理由をきちんと説明しています。

●取り組みを始めて2年経ち、すでに「笑がおプロジェクト」の目的の共有が難しくなると共にマンネリ化も始まっている。今後、継続して啓発を続けると共に、新たな視点での取り組みを工夫していく必要がある。

